View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai Gaidai University Repository

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

(even) if 再考 : 譲歩か条件か

著者	田中 廣明
雑誌名	研究論集
巻	82
ページ	19-34
発行年	2005-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00006268/

関西外国語大学 研究論集 第82号（2005年8月）
Journal of Inquiry and Research, No.82（Aug. 2005）

（even）if 再考

――譲歩か条件か――

田　中　廣　明

1．はじめに

本稿では、田中（1998：第4章）で扱った「譲歩読みをされる if」（以下、（even）if と表記）を再考し、藤井（2002）への反論を述べる。田中（1998：169）では、（even）if の生起条件を次のように考えた。（even）if p, q として：

（1）a.（even）if が成立するためには、p と q の非両立性が示されること。
b.（even）if の使用には、「p1であれば q。p2, p3であっても q」という流れがあること。
c. b を成立させるためには「誘導推論（invited inference）の否定」が関わっていること。
d. 発話条件の if 節も（even）if 読みが可能であり、通常の（even）if の p と q の非両立性から説明が付くこと。

本稿では（1）の条件のうち、（1c）の「誘導推論の否定」を再考し、この条件は譲歩条件文一般に当てはまる条件であり、特に、譲歩性を概念化させている（even）if に当てはまると考える。

一般に、if は条件の読みであるのか、譲歩の読みであるのか多義（ambiguous）であり、文脈や語用論的な前提条件、あるいは音調によってその曖昧性が除去される。Bolinger（1975: 473; cf. 小西（編） 1989：623）が述べるように、話し言葉ではその音調で区別されるし、また書き言葉でも文脈によって明示される。

（2）You would have been welcome if you had said nothing at all.
a. = （even）if: nothing at all が上昇下降調.（たとえ言うべきことを何も言わなかった

としても歓迎されただろう）

b. =if: wel (come) に強勢を置き all が下降上昇調.（もし何も言わなかったら歓迎されていただろう）

書き言葉では、この両者は用いられる文脈によっても区別される。(2a) は「通常なら何も言わないと歓迎されなかったのだが、この場合は特に…」という含みがあり、(2b) は「静かにすることが歓迎される第一条件であった」ことが述べられている。

if が (even) if と解釈されるためには、p から通常なら生じるはずの帰結が生じずに、p とは両立しない q が結論されることが、文脈や背景的知識から示される必要がある。

(3) a. *If* I were a Rockefeller, I would not be able to pay for this. (König 1986)

b. *If* Calvin was still holding her hand, she could not feel it. (*ibid.*)

c. She's breath-takingly beautiful, delicate, warm, smart, very smart, and almost everything she says is interesting. I can't blame you *if* you've fallen in love with her.--I. Wallace, *The Guest of Honor*（彼女は息をのむほど美しく、繊細で、暖かく、とても頭が良かった。それにほとんど何を言っても面白かった。彼女に恋をしても責められない。）

(3) はそれぞれ「通常なら if p, ～q であるはずだが」と解釈できるという点で、譲歩文としての性格を持つ。坂原 (1985)、小泉 (1987) が「譲歩文は条件文の不成立を推意する」とするのは、通常の状況で成立する条件が、この特別な状況に限り成立しないことを述べたものである（以上、田中 1998：169－170)。ごくインフォーマルに言っても、この p と q の「非両立性 (incompatibility)」が、if を条件と解釈するか、譲歩と解釈するのかの英文解釈上の鍵となる。

また、(3) の例すべてについては、(even) if 節である p の内容が現実にはあり得ないような可能性の低い事柄であり、主節 q が否定文であるという特徴がある。さらに、田中 (1998：171) でもあげたが、位置と音調の問題がある。Haiman (1986) によると、(even) if 節は主節 q に後続することが多い（なぜ多いかについては後述)。もし (even) if 節が先行すれば、特別なイントネーション・パターンになり、(even) if p, q で、p の最後の部分に強いストレスと高いピッチがあり、q に入ると急激にピッチが落ちる。Haiman はこれを "contemptuous squeal intonation（軽蔑的な金切り声のようなイントネーション)" と呼んでいる。

藤井 (2002) も指摘しているように、英語の if に条件と譲歩の 2 つの意味が読み込まれているのは、この if が意味論的に多義なのか、あくまで語用論的な条件によって多義なのかで

意見が分かれる。本稿では、その理論的な意義については扱わないこととするが、日本語を当てはめた場合、「ならば」か「ても」かで区別できるところから、日本語のほうが語用論的な要因に鋭敏である（sensitive）と言うことができる。

2．（even） if 再分析

2.1　even if の推論過程

まず、p と q が両立しない場合の推論過程を even if から考えてみよう。以下、否定を除いた even if 節の前件を p、後件を q とする（(4a)では p＝Basil turn up、q＝the party be fine、(4b)では、p＝you get an A、q＝you get a scholarship）。

（4）a. Don't worry, the party will be fine *even if* Basil *does* turn up.
　　b. You will get a scholarship, *even if* you don't get an A.

（4a）は、Don't worry から「Basil がパーティーに現れれば、パーティーが台無しになる」という語用論的前提（以下、even if の推論を導くための前提条件なので、「推論前提（inferential premise）」と呼ぶ）が得られる。If p, ～qである。（b）も同様で、奨学金を得るためにはAをとっておく必要がある。Aをとれなければ奨学金はもらえない（逆に言えば、つまり誘導推論（invited inference）をとれば、Aをとれば奨学金がもらえる）のであるから、If ～p, ～q（≡If p, q）である。そういう推論前提があるところへ、現実の発話された条件 p と ～p がそれぞれに与えられる。その結果、通常の推論前提に反して、（4a）（4b）とも Even if p, q が帰結される。

（4）a'.（＝4a）推論前提：If p, ～q.
　　条件：p
　　＝/⇒譲歩帰結：∴Even if p, q.

　　Basil がパーティーに現れれば、パーティーが台無しになる
　　Basil がパーティーに現れる
　　＝/⇒譲歩帰結：Basilがパーティーに現れても、台無しにならない

b'.（＝4b）推論前提：If ～p, ～q.（≡誘導推論 If p, q）

条件：～p

＝/⇒譲歩帰結：∴Even if ～p, q.

Aをとらなければ奨学金がもらえない（Aをとれば奨学金がもらえる）

Aをとらない

＝/⇒譲歩帰結：Aをとらなくても奨学金がもらえる

この推論は論理的に妥当であろうか。当然「否」である。通常は、(5a)（5b）のような推論が妥当な推論で、「modus ponens（肯定式、構成的仮言三段論法）」あるいは「前件肯定」と呼ばれる。(5a）は（4a'）と、(5b）は（4b'）と対応している。

(5) a. If p, ～q.

p

∴ ～q

Basil がパーティーに現れれば、パーティーが台無しになる

Basil がパーティーに現れる

∴パーティーが台無しになる

b. If ～p, ～q

～p

∴～q

A をとらなければ奨学金がもらえない（A をとれば奨学金がもらえる）

A をとらない

∴奨学金がもらえない

（4a'）では譲歩帰結が q となっており、推論前提は ～q であるので、(5a）のような妥当な前件肯定の推論では～ q となるはずが、q となっている。同様に、(4b'）でも譲歩帰結が q となっており、本来なら（5b）のような妥当な前件肯定の推論では ～q となるはずである。これが譲歩文の場合の推論である。「通常なら q（あるいは ～q）であるのに、結局のところ ～q（あるいは q）であり、それはなぜかというとなんらかの理由 r があるためである」とされる。

(6) a. p であるのに、～q であった。
b. p であれば、q であるけれども、r であるから、(p であっても) ～q であった。

(6a) は、条件文と理由文を組み合わせた推論 (6b) が働き、「前半の条件文が成立しないのは、後半の理由によると解説」(小泉 1987) する文ということになる。坂原 (1985; 1993)、小泉 (1987) の「条件文の不成立」という推論過程である。つまり「条件文の不成立」とは、「前件肯定の妥当な推論が成り立たない」と言い換えてもよい。

このことを次の例で例証してみよう。

(7) "We'll have to try to cross it and take our chances," Jamie said. Banda shook his head. "The guards will shoot us on sight or hang us. *Even if* we were lucky enough to slip by the guards and dogs, there's no way to get by the land mines. We're dead men." (S. Sheldon, *Master of the Game*) (「砂漠を横断しよう。それしか方法はない」ジェミーは言った。バンダが首を振った。「見張りに撃ち殺されるか、縛り首にされるかのどっちかですぜ。運よく見張りや番犬どもから逃れられても、地雷原を避ける方法はないですよ。どっちにしたっておだぶつでさ。」)

通常なら「見張りや番犬から逃れられれば、助かる」ことが前提として想起される。これを If p, q とすると、

(8) If p, q.
<u>p　　</u>
＝/⇒譲歩帰結：～q

という推論の流れになり、最終的に「助からない」＝「地雷原を避ける方法はない」(～q) となり、「前件肯定の妥当な推論」が成り立たない。even if 節で最も多いパターンである。

2.2 条件と譲歩

藤井 (2002) は、中・上級の日本語学習者がおかす間違いに、譲歩の「ても」の未習得があることに気づき、(even) if と「ても」は対応関係にないことを述べている。例えば、藤井の報告によると、次の (9) (10) の「ても」文が、日本語の非母国語話者からは「一体どうしてここでテモを使うのか、タラを使えばいいではないか」という疑問が寄せられると言う (藤井 2002：267)。また、藤井が分析例としてあげている (11) もこの状況では even if では書き換

えが不可能とされる。

(9) サンフランシスコに行ってもケーブルカーに乗らない方がいいですよ。

(10) こんなことを勉強しても {試験には出ないよ／しょうがないよ／だめだよ}。

(11) a. ここで待っていてもバスは来ませんよ。あちらでお待ちにならないと。

b. *If* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.

（この状況で、#*Even if* you wait here, the bus won't pick you up.）

しかし、(even) if のうち、even if で言い換えが可能な (even) if もあり、事情は複雑である。

(12) I wouldn't work for them {*if* / *even if*} they paid me twice my current salary. (CALD)

(13) {*If* / *Even if*} somebody throws you a ball, you don't have to catch it. (藤井2002)

(14) {*If* / *Even if*} I were Rockefeller, I would not be able to pay for this.

(15) Will you go hiking {*if* / *even if*}it rains?

このように、(even) if でも even if で言い換え可能かどうかを検証することにより、(11) に代表される (even) if は英語の母国語話者は「譲歩」の意味とはとっておらず、(12) ～ (15) は「譲歩」ととっていることがわかる。まとめると (16) のようになる。

(16)

	英 語		日 本 語	
グループ	形 式	意 味	形 式	意 味
A	if	条件	ならば**	条件
B*	if	条件	ても	譲歩
C*	if	譲歩***	ても	譲歩
D	even if	譲歩	ても	譲歩

* BとCが本稿で扱っている (even) if。

** 「ならば」、「なら」、「たら」、「すると」などの異形については議論せず、「ならば」で代表させる。

*** 単に「譲歩」だけでは言葉不足で「譲歩的条件文」が正確である。

2.3 グループB

藤井（2002：266－267）は、(11)（(17) として再録）の（even）if について次のように述べている。

(17) a. ここで待っていてもバスは来ませんよ。あちらでお待ちにならないと。

b. *If* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.

（この状況で、#*Even if* you wait here, the bus won't pick you up.）

藤井（2002）は、次のように論じる：「英語で even if が不自然であるのは、この『バスをここで待つ』という事態と『バスが来ない』という事態に非両立性がないから（あるいは少なくとも英語では非両立性が感じられない）と考えられるかもしれない。英語では、通常、ここでバスを待てばバスが来ることを把握できないことになる。事態間の依存関係や因果関係がないことになる。言い換えると、『ここで待つ』という条件から想起されるのは『バスが来る』という帰結ではないのである。しかし、事態間の依存関係あるいは因果関係が、日本語の場合と英語の場合で感じられるかどうかの問題ではない。話し手が聞き手がバスが来ると期待している、と察するかどうかであるとしている。」

われわれ日本人の日常生活を内省してみると、ここ（バス停らしきところ）で待っている人を見ると、バスを待っているのだなと察することが多い。もし、「ここ」がバス停ではないと知っていれば、（親切に）相手に教えてあげるのである。英語では、相手の置かれている状態を察するところまでは行かないという議論になる。藤井（2002：267）は、「『事態間の依存関係』を否定していると言うより、話し手が聞き手の行為から察する聞き手の期待に共感するかどうかが肝心であり、否定されているのは聞き手の期待そのものである」としている。

しかし、はたしてそうであろうか。確かに、日本語と英語では譲歩文のとらえ方が異なるようである。また、相手の置かれている立場を察することにより話を進めていくのは、日本語の特性に合致しているように見える。ところが、英語でも（17b）を次のように続けると even if が可能となる。

(18) If you wait round the back, the bus won't pick you up. *Even if* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.

(18) の推論過程を考えてみると、前文で wait round the back を条件として置くことにより、wait here との尺度性（scalarity）が生まれる。最もバスが拾ってくれそうにない条件が you

wait here である。そうすることで、バスが拾ってくれそうな場所としての「ここ」が含意されることになる。

(18') If p, ～q.
(If r, q)
r
＝/⇒譲歩帰結∴(Eve n if r,) ～q.
(where p = to wait round the back, q = the bus pick you up, r = to wait here)

もし裏で待てばバスは来ない
(ここで待てば来るかも知れない)
ここで待つ
＝/⇒譲歩帰結：ここで待っても来ない

このように、尺度を設定することにより、前提条件が生まれ、譲歩文として「肯定式、前件肯定」は成り立たないという推論ができる。(17b) はその推論ができないから譲歩とは感じられない。単に条件の意味だけである。ちなみに、(18) の第1文、If you wait round the back も「裏で待てば」としてもよいし「裏で待っていても」としてもよい。

さらに、藤井 ((2002) はpとqの命題間そのものに対立が感じられなくても、「ても」でその場限りの語用論的な意外性を付け加えることができると考えている。藤井 (2002：267注) 12) が引用している、益岡・田窪 (1992)『基礎日本語　改訂版』(くろしお出版) の「『譲歩の表現には・・・一般的依存関係を否定するものと・・・事態間の個別的依存関係を否定するものとがある』という的を射た指摘がある」というのは、日本語の譲歩表現が個別的 (つまりその場限りの語用論的) 関係によるところが大きいと言うのである。

では、どのような if がグループ B であろうか。以下、even if では言い換えられない例をあげる。

(19) A: Are we going to the party tonight?
B: Well, I have a headache, so I'd rather stay in bed. *If* I go, I won't enjoy it. (藤井 2002)

(20) Daily practice: The importance of daily practice cannot be overstated. After teaching many speed reading classes, one trend has become obvious: Those who practice daily

are the ones who get really good at speed reading while those who neglect it don't get good at it.

Of course, all is not lost *if* you forget to practice once or twice each week.（毎週の1度か2度の練習を忘れてもすべてが無駄だったというわけではない）But the more you skip practice, the worse your end result will be.

（21）"What do you want from me?" "I want you to do it (i.e. make love) to me." "No. It is impossible. ①If your father found out, he would kill me." "And ②*if* you leave here, he will kill you. You haven't got much choice, have you?"（S. Sheldon, *The Sands of Time*）（「僕に何を望んでいるの？」「あれをしてほしいの。」「そんなことできないよ。もしお父さんに見つかったら、殺されちゃうよ。」「ここから逃げ出しても殺されるわよ。選んでなんかいられないわよ。」）

（22）'Well, I'll eat it,' said Alice, 'and if it makes me grow larger, I can reach the key; and *if* it makes me grow smaller, I can creep under the door; so either way I'll go into the garden, and I don't care which happens!'（Lewis Carrol, *Alice's Adventure in Wonderland. Through the Looking Glass*）（坂原 1993）（奇妙な薬を飲んでしまったアリスは、部屋から庭に出たがっているが、通り抜けられない。箱の中にお菓子があるが、食べると大きくなるか小さくなるか分からないので、食べるのをためらう）「じゃあ食べてみるわ。」とアリスは言った。「それで、もし大きくなれば鍵に手が届くし、{小さくなっても／また小さくなれば（岩崎民平（訳）（角川文庫、p. 14））} ドアの下をくぐれるし、どちらにしても庭に出られる。どっちだってかまわない。」）

（19）（20）は帰結節が否定であるという特徴を持つ。If p, ～q となっている（実はグループBにはこのタイプが多い）。（21）（22）は帰結節は肯定であるが、（期待に反して）「殺されないことはない」「ドアの下をくぐれないことはない」と読めるため If p, ～～q と考えてもよさそうである。日本語では（19）（22）は「ても」でも「ならば」でも可能なようであるが、（20）（21）は「ても」の方がよい。

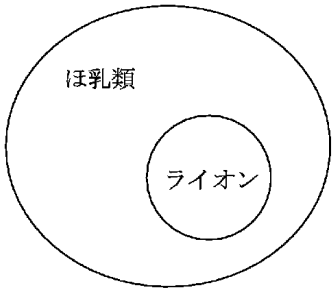
このグループBは母国語話者にとっては譲歩とはとれないのであるから、何らかの条件性を表している。条件性には十分条件と必要条件がある。次のような仮説を立て証明してみよう。

（23）a. グループBの（even）if の p は、他に成り立つ条件が存在するという意味で十分条件（sufficient condition）を述べる。

b. even if の p は必要十分条件となることを阻止する。p 以外に当てはまる条件が存在することを述べる。

まず十分条件、必要条件から概説する。「ライオンならばほ乳類である（ライオンはほ乳類である）」を考えた場合、ライオンであることはほ乳類であるための十分条件、ほ乳類であることはライオンであるための必要条件となる。ライオンはほ乳類なので、ほ乳類であるためにはライオンであれば十分である。ライオンという条件が満たされればほ乳類が必ず成立する。一般に、ある条件 p が帰結 q を十分条件としているかどうかは、以下のベン図でも明らかなように p と q に「含意関係（entailment）」が成り立つ。

(24)



しかし、ほ乳類であるためにはライオンであることが絶対必要というわけではないので、「ライオンならばほ乳類である（ライオンはほ乳類である）」において、ライオンであることは必要条件ではない。他にもほ乳類であることの条件が考えられるからである（例えば、猿であることなど）（以上、野内（2003：46－48）より）。

If p, ～q を考えてみよう。Declerck and Reed（2003：433）は、Davies（1986：467）が条件文の後件の否定に2種類あるとするのを十分条件性でとらえ直している。ここで言うグループBの（even）if の否定の構造は（25b）にあたり、（25）の譲歩としての日本語訳（表（16）でのグループBの列の日本語「ても」）は、（25a）の構造を持ち、日本語の推論過程に即した訳であると思われる。

(25) The cat is not purring if it is on the mat.

a. *It is not the case* that the cat is purring if it is on the mat.（外部否定：denied condition）

（＝it is not true that ‘if [＋p], [＋q]’）「そのネコはマットの上にいるとごろごろと鳴いているわけではない（鳴くようなネコではない）」

b. If the cat is on the mat, *it is not the case* that it is purring.（Q の否定：conditioned denial）
（＝'if［＋p］,［－q］'）「そのネコはマットの上でごろごろと鳴いていない」［＋P］は「－Q］の十分条件（＋は肯定、－は否定という意味）

（25b）と解する If p, ～q は、p が～q の十分条件でしかない。つまり、「ごろごろとは鳴かない（つまりおとなしくしている）」ためには「マットの上にいる」だけでよく、そのほかの条件も考えられる。ここで、日本語訳を「も」としたのは、他にも条件がある（十分条件性）ことを述べる「追加（additive）」の「も」の意味を出すためである。ここで、日本語の母国語話者と英語の母国語話者の齟齬が生じる。日本語では、「ならば」より「ても」の方が据わりが良く、譲歩文と考えてしまう。しかし、それが英語の条件性を反映した正確な和訳かというと疑問が残る。

これに対して、（25a）の否定は外部否定である。こちらの意味構造（外部否定）が、（5）（8）（18）で述べた通常の譲歩文（グループDとC）の推論過程と合致する。通常なら「そのネコはマットの上にいるとごろごろと鳴いている」（if［＋p］,［＋q］）が、この場合に限りそうではなく（外部否定で）、譲歩帰結の「たとえマットの上にいてもごろごろと鳴いていない」が導かれる。

同じことを（20）で考えてみよう。（20）の p（1，2 度練習し忘れる）は～q（すべてが無駄だったというわけではない）のための一つの条件でしかない。ただし、他にもあるかも知れないことは明示的ではない。

上述で、（19）は、「ても」でも「ならば」でもよいとした。「行けば楽しくない」でもよいのは、「行けば必ず楽しくない日に遭うだろう（q if and only if p）」という必要十分条件も述べることができるためである。「ても」は「追加」の意味で、楽しくない条件は他にも（例えば、今風邪を引いているので風邪気味でなど）あることが含意される。

次に、q が否定ではない肯定の（21）（22）を考えてみよう。（21）について、かつて筆者は田中（1998：177－178）で次のように考えた。

（26）（even）if は②の if 節である。①は「お父さんにわかったら殺されるよ」、②は「ここから逃げ出しても殺されるのよ」となる。①を if p1, q、②を if p2, q とすると、①の話し手が p1 は q に対して単に十分条件であると意図しているのか、必要十分条件であるのかまでは述べていないのにもかかわらず、②の話し手は、q が成り立つためには p1 だけでは不十分で、p2 でも十分であると述べている。すなわち、①では必ずしも意図されていない必要十分条件であるとあえて解釈し、そこから引き出される誘

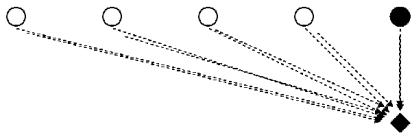
導推論（if～p1, ～q）を否定しているのである。p2を引き出すのは、p1がp2と同一尺度上に並び、qが成立する最低条件になっているためである。

これは、②の（even）ifを「ここから逃げ出しても殺されるわよ」という日本語訳から譲歩ととった場合の推論過程である。「見つからなかったら殺されない」つまり「逃げて殺されないわけがない」（～[if p2, ～q]）となり、譲歩帰結が導かれる。あくまで、日本語の「逃げても」の推論過程である。しかし、英語の② if you leave here, he will kill you. は、彼に殺される条件が唯一絶対的に「逃げたら」というのではないこと、つまり、十分条件であることを述べている。そのために①「お父さんにわかったら殺されるよ」と他の条件を並べているのである。

同様に、(22) も「追加」の「も」ととらえると、条件を次から次へと述べていると考えられる。

では、グループBは、尺度性があるのであろうか。単なる十分条件である場合、他の条件があってもよいという含みはあっても、この条件が最も可能性の低い条件でるという含みはない。また、そこからその条件が意外であるという、even if に見られる意外性の条件も存在しない。以下の図示のように条件が並列的に並んでいるにすぎない。

(27) Bグループの条件性（○は他の条件、●は当該の条件（p）、◆は帰結（q）、矢印は条件性）



しかし、これでは If a match is dry, it lights.（マッチは乾けば火がつく）というqが肯定の十分条件文（「ても」ではなく「ならば」の日本語訳になる文）と区別できないのではないという疑問が生じる。この文も（27）と同じ十分条件である。火がつくには乾くだけではなく、「マッチをする」とか他の条件も考えられる。十分条件という点では、(27) と同じ図示ができる。

(19) (20) のようなqが否定の場合の十分条件を考える。一般に、日本語ではqが否定の場合、「ならば」の条件文は、必要十分条件であることが多い。たとえば、「この試合に負ければ決勝リーグへ行けない」では、決勝リーグへ行けないのはこの試合に負けたのであり、敗戦が唯一決定的な条件である。なぜなら、一般に否定文は肯定の対立概念で使われることが多く、「決勝リーグへ行けますか」「いえ、行けない」という応対でも、行けない場面設定あるいは条件が（暗黙の内にでも）前文の疑問文が述べられている状況に限定されるからである。そこ

で、他の条件の存在が前提となっている If p, ～q では、日本語では追加の働きを持つ「ても」を使わざるを得ない。ところが、「ても」は今まで論じてきたように、譲歩の意味で、この場合に限ってという非両立性を表すため、十分条件の if が譲歩を表すとされているのである。

では、なぜ英語では、譲歩の推論過程が働かないのであろうか。また日本語では譲歩ととる方が座りがよいのであろうか。言語学の mailing list である Linguist List で、(17b) ((27) として再録) を even if にした場合 (可能だとして) の違いを尋ねてみた。ある母国語話者の回答は (28) である。

(27) *If* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.

(28) In (27) the speaker is suggesting the possibility that the hearer will be waiting for the bus in that place. If you replace the "if" with "even if" the speaker is implying that the hearer is grossly mistaken in thinking that the bus will stop there just because he is standing there. In other words, the first statement with the conditional is more polite because the speaker accepts the fact that he is making an assumption about why the hearer is standing there.

even if にすると、通常なら「ここで待つとバスが来る」であるため、聞き手は立っているだけでバスが来ると思っているのだと話し手が聞き手がひどく誤解している状況を察知すると言う含みになる。そういうふうに聞き手の心の中を覗き、その誤解を暗示するのは、かえって失礼なのである。そのため、ポライトネスの度合いが下がる。この点では、藤井に同意する。日本語では相手の状態を察し、そこから通常の事態を想定し、前提として推論を進める。いわば、藤井が主張しているのはまさにこの点で、日本語はそれだけ「お節介」なのである。しかし、筆者の調査だけでも、英語以外に、フランス語、トルコ後、中国語、韓国語なども英語と同じ使用である。いわば、日本語が特異な性質を持っていると考えてもよいことになる。こういうことがあるであろうか。この点については今後の課題とする。

2.4 Cグループ

このグループは、本来の意味で (even) if の譲歩読みである。

(29) a. *If* I were a Rockefeller, I would not be able to pay for this.
b. *If* we give him the VIP treatment, he won't be content. (König 1986)

Cグループは（29）を代表する（even）if である。大きな特徴として、すべて even if で言い換えが可能の（even）if である。このグループは even がなくても譲歩性が感じられ、p を尺度上の極端な点上に置くことができる。（29a）（29b）のように生じる可能性が非常に低い語句 Rockefeller や VIP treatment などの語句が even の代わりをしていると考えられる。

上述したように、このCグループの if 節は後置されることが多いと言われる。この観察は（29a, b）のように前置される if 節の存在が確認されると誤った観察のように見えるが、あながち的を射ていないこともない。なぜなら、後置された if 節は comment を表すことが多いからである。一般に条件の if 節は topic を表すとされる。「・・・しちゃだめ」という日本語の条件文に典型的に見られる相手をしかる形式でも、「・・・しちゃ（・・しては）」の条件節は相手のしたことを認識して述べている部分であり、それだけ topic 性が強いと言える。ところが、譲歩の if 節は、「他にもあるかもしれないが、この場合に限っては・・・しても」と情報伝達上重要な comment 的な譲歩条件で述べることが多い。それだけ、譲歩という概念が特別なのである。

2.5 Dグループ

これは通常の even if である。

（30）a. Don't worry, the party will be fine *even if* Basil does turn up.
　　b. You will get a scholarship, *even if* you don't get an A.

ところが、（30a, b）の even を取ることはできない。Rockefeller や VIP treatment のような極端な尺度上の点を示す語句（生じる可能性が低い語句）が見あたらないため、Cグループにも入らないからである。当然、p と q の非両立性が感じられ、Bグループに入れることもできない。

CとDを統合して譲歩条件として、（23b）の仮説を考えてみよう。これは目新しい仮説でもなく、Declerck and Reed（2001a: 432, 2002b）, König（1986）でも述べられていることである。たとえば（30a）は、「Basil が現れればパーティーが台無しになる」という前提条件がある。If p, ～q である。この条件 p は～q に対して「必要十分条件」である。なぜなら、パーティーが台無しになるには、Basil が現れるときに限るからである（双方向条件文（bidirectional conditional）、条件文の完成（condition perfection）、誘導推論（invited inference）と言われる。詳しくは Horn（2001）を参照。ここではそれがなぜ、どういう場合かについては述べない）。ところがそれに反して、Basil が現れても台無しにならないのであるから、even if はこの必要十分条件を阻止（排除（preclude））していることになる。しかし、p は Bグループで

述べた十分条件にもならない（ただし、Bグループと同じように、他にも成り立つ条件は、尺度的に（階層的に）存在する）。一般に even if p, q には因果関係がないからである。p が q を引き起こすのではない。

3．終わりに

以上、（even）if の推論過程と意味構造を考察した。

（31）（＝（16））

	英　語		日　本　語	
グループ	形 式	意 味	形 式	意 味
A	if	条件	ならば**	条件
B*	if	条件	ても	譲歩
C*	if	譲歩	ても	譲歩
D	even if	譲歩	ても	譲歩

表（31）では、Bグループが特異な働きをする。意味構造は、If p, ～q で、推論過程は p が q の十分条件であることを主張する。さらに、日本語の「ても」は、～[if p, q]となることも注意が必要である。さらに、譲歩文一般に、「肯定式」「前件肯定」の正しい推論を阻止する推論過程を通っている。

参考文献

Bolinger, D. (1975) *Aspects of Language*, Second Edition. New York: Harcourt Brace Jovanovich.

Dancygier, B. (1998) *Conditionals and Predication: Time, Knowledge and causation in Conditional Constructions*. Cambridge: CUP.

Declerck, R. and S. Reed. (2001a) *Conditionals: A Comprehensive Empirical Analysis*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Declerck R. and S. Reed. (2001b) "Some Truths and Nontruths about *Even If.*" *Linguistics* 39 (2), 203-255.

服部雅史（2001）「思考の規範性と適応性」辻 幸夫（編）『ことばの認知科学事典』, 355－360. 東京：大修館書店.

服部雅史・中川正宣（2001）「条件文推論の学習過程――論理的推論学習支援システムに向けての実験的研究」『日本教育工学会論文誌』, 25(1), 1－12.
http://www.psy.ritsumei.ac.jp/～hat/publications/index-j.html

藤井聖子（2002）「所謂「逆条件」のカテゴリー化をめぐって」牛越直樹（編）『シリーズ言語科学4・対照言語学』249－280. 東京：東京大学出版会.

Horn, L. (2000) "From *If* to *Iff*: Conditional Perfection as Pragmatic Perfection." *Journal of Pragmatics* 32, 289-326.

James, F. (1986) "Semantics and Pragmatics of the Word *If*." *Journal of Pragmatics* 10, 453-480.

小泉保（1989）「譲歩文について」『言語研究』第91号, 1－14.

König, E. (1986) "Conditionals, Concessive Conditionals and Concessives: Areas of Contrast, Overlap and Neutralization." In E.C. Traugott, A. ter Meulen, J. Snitzer Reilley, and C.A. Ferguson (eds.) *On Conditionals*. 229-246. Cambridge: CUP.

小西友七（編）（1989）『英語基本形容詞・副詞辞典』東京：研究社.

前田直子（1993）「逆接条件文「～テモ」をめぐって」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』149－167. 東京：くろしお出版.

三浦俊彦（2004）『論理学がわかる事典』東京：日本実業出版社.

毛利可信（1972）『意味論から見た英文法』東京：大修館書店.

野内良三（2003）『実践ロジカルシンキング入門』東京：大修館書店.

野矢茂樹（1994）『論理学』東京：東京大学出版会.

坂原茂（1985）『日常言語の推論』東京：東京大学出版会.

坂原茂（1993）「条件文の語用論」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』185－201. 東京：くろしお出版.

Sweetser, E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: CUP.（澤田治美（訳）『認知意味論の展開・語源学から語用論まで』東京：研究社出版.）

田中廣明（1998）『語法と語用論の接点』東京：開拓社.

（たなか・ひろあき　外国語学部教授）